古代ギリシア人の知恵

岩崎允胤

遠い昔に古代ギリシアの思想家ののこした言葉のなかから、歴史をこえて、われわれは人間の知恵（σοφία）というものを聞きとることができる。わたくしはここで、かれらの三つの言葉をとりあげ、それについて若干考えてみたいと思う。

1

「人間への愛」（φιλανθρωπίη）の存するところ、技術への愛（φιλοτεχνίη）もまた存する」（ヒッポクラテス『医学集典』[1]）。

今日、『ヒッポクラテス医学集典』と名づけられる論集が伝わっている。これは、若干のよそのものも混入しているが、主として、紀元前六世紀頃から、エーゲ海の小アジア沿岸に近いコス島を中心に広く活動したヒッポクラテス（Hippokrates）の医学派の人々の手に成った諸論文を、のちにアレクサンドレイアの図書館で現在の形に編集したものとされている。

周知のように、エーゲ海の小アジア沿岸にあるいわゆるイオニアの植民都市、ミレトスでは、当時その地域における貨幣の流通を媒介とする商工業のいちじるしい発展を背景にして、自然現象を理解するさい、神話の神々の導入を排し、自然界の諸相をそれ自体として認識しようとする努力がはじまった。こうした自然にたいする新しい接近の態度をとった人びととして、タレス（Thales）、アナクシマンドロス（Anaximandros）、アナクシメネ

(Anaximenes) の名が伝わっている。かれらは自然学者（ピュシオロゴイ）とよばれるが、今日の狭い意味での学者ではなく、経験的知識にも富み、実際的な仕事にもかかわっていた。ところで、かれらにおいては、科学的研究はまだ哲学的思索から分離していないが、自然にたいする上述の見方は、世界についての科学的認識に向かっての最初の一歩をふみだしたものといえるだろう。

イオニア自然学のこの新しい視点をうけつぎ、観察と経験にもとづいて対象の本性に迫ってゆこうとする実証科学的な態度をとったのが、ミレトスにほど近いコス島のヒッポクラテスとその医学派である。『医学集典』中のどの論文にも、病気の原因や治療法について、神話や迷信はもちだされていない。そればかりか、当時「神聖な病気」とよばれて神秘化されていた癲癇について、『神聖な病気』と題する論文の筆者はこう書いている。「わたくしには、この病気が、ほかの病気より以上に神的であるとも神聖であるとも思えない。この病気は自然的原因をもっている。ところが、人々は、経験不足と、この病気が特異で驚くべきものであることとのために、この病気が神的なものである、と考えたのである。」(2)

それでは、この医学派の人々は自分らのたずさわる医術をどのようにとらえていたであろうか。それについては、さきに掲げた言葉「人間への愛の存するところ、技術への愛もまた存する」によってたいへんよく理解されると思うのである。かれらは、自分らの知識を、臨症の場で適用される技術として理解し、かつそれに正当な誇りをもっていたのである。のちにプラトンやアリストテレス――その活動は紀元前四世紀になる――などに顕著にあらわれてくる技術への蔑視の態度、なにか純粋な思惟活動が尊く、現実の問題にかかわることが卑しいかのような偏見には、ヒッポクラテスの医学派は、イオニアの自然学者たちと同様に、すこしも汚されていなかった。しかも、かれらは、その業とし誇りとする技術が人間に奉仕するためのものであり、貧しい人々にたいしては、いっさいの利得をすてて診療に当らなければならない、そして医者の義務は病気の研究よりもむしろ、まずもって病人を治療することにある、と考えていた。

次に、上述の言葉の伝えられている箇所の前後の文を引用しておこう。「あまり不親切なやり方をしないように私はすすめる。患者には余分な財産があるのか、また

生計の資力があるのかを考慮するようにすすめる。そして、かつて受けた恩恵や、現在の自分の満足な状態を念頭にいれて、ときには無料で奉仕するがよい。異邦から来ていて困窮している人に指導を与える機会があったならば、できるかぎり、かれらに尽力するがよい。というのは、人間への愛がある〔存する〕ところ、技術への愛もある〔存する〕からである。病気にかかって自分の状態が危険なことに気付いていても、医者の誠意さに深く感じて健康を回復するものもいるくらいである。」

医療の荒廃ということがしきりといわれ、医療の倫理を確立することの必要が叫ばれている昨今だが、ヒッポクラテス派のこうした思想は、医学と医療の原点をさし示しているといえるだろう。

わたくしはなお、『医学集典』には、「学芸は長く、生命は短い」という、有名なラテン語の箴言（ars longa, vita brevis）のオリジナルといえる、ギリシア語の表現がおさめられている（Ὁ βίος βραχύς, ἡ δὲ τέχνη μακρή）ことを指摘しておきたい。ここでは、テクネーを「学芸」と訳しておくが、古代では、このギリシア語は、ラテン語の ars と同様に、技術だけでなく学芸、学問をも含める意味でも使われており、[3] この箴言は、たんに狭い意味での技術だけではなく、広く学芸にかかわるものとして、うけとられてきたからである。

人間の学問・技術は、実践の場にのぞんで、その意義がためされる。現実の場はきびしい。そうしたきびしい場にのぞむ無数の人々によって学問・技術は担われ、きたえられ、そうして、発展してゆくのである。個々の人間の生命は短い。その人間たちが現実の場でひとつひとつきたえあげたものが、時代から時代へとうけつがれ、ひきわたされてゆく。そこに学問・技術というものの確かな本領がある。だから学問・技術は永遠である。かれらヒッポクラテス医学派の人々は学問・技術をこのようにとらえていたのである。

そこで次に、この有名な言葉のおさめられている文章の全体をあげよう。「生命は短く、技術〔学芸〕は長い。好機は束の間に去り経験はあてにならず、判断はむつかしい。しかも、医者は、なすべきことを自分で果たす用意ができていなければならない。そればかりか、患者と看護人と外的な諸条件をととのえる用意もできていなければならない。[4]」確乎としたヒューマニズムの声を聞く

ことができる。[5]

（1）Hippokrates, Parangeliai, VI, Loeb Classical Library, Hippocrates, I, p. 318. 小川政恭訳『ヒッポクラテス、古い医術について、他八篇』岩波文庫、一八四ページ。ただし、以下、引用する訳文は、注で掲げる訳書にかならずしもよっていない。

（2）Hippokrates, Peri hierēs nousou, I, Loeb Cl. Libr., ibid., II, p. 138. 同上訳、三八ページ。

（3）たとえば、アリストテレス『形而上学』第一巻第一章などを参照。

（4）Hippokrates, Aphorismoi, I, ibid., IV, p. 98.

（5）B・ファリントン『ギリシア人の科学』上、出隆訳、一九五五年、第五章を参照。

2

「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」（アリストテレス『形而上学』[1]）。

Πάντες ἄνθρωποι τοῦ εἰδέναι ὀρέγονται φύσει.『形而上学』開巻、冒頭のこの文章を静かに音読しよう。これは、ずっしりと重い内容をもつこの書物の始めを飾るにふさわしい、荘重なひびきをもつ言葉である。ここでは、あたかも古代の知恵がその重い扉をおもむろに開いて、遠くわれわれに語りかけようとするかのようである。

『形而上学』といえば、アリストテレス（Aristoteles）の存在論（存在としての存在[2]についての研究）ないし神学の展開されている[3]書物である。もっとも、アリストテレスは『形而上学』という標題をもつ著作を書いたのではない。上述のテーマについてかれの書きのこした一連の諸論稿が、後世になって（前一世紀に）アンドロニコス（Andronikos）によって編集され、その論集に、さらにのちになって metaphysica（*τὰ μετὰ τὰ φυσικά*. 訳して）『形而上学』という名称がつけられた。[4] かれ自身は、この学問分野を「第一哲学」（*πρώτη φιλοσοφία*）とよんでいた。ともあれ、この論集は、存在という存在ないし神という哲学の根本問題とされる事柄について、アリストテレスが、つぎつぎと提起されるいくたの難問を踏みこえ、さらに踏みこえながら、粘りづよい強靱な思索力をもっておこなった考察をしるしたものであり、それ以後の哲学の歴史のうえに、測りしれない決定的ともいえる影響を与えた。それは、新プラトン主義、イスラムの哲学、キリスト教的なスコラ哲学、近世になって、ス

ビノザ、ライプニッツ、さらにカント、ヘーゲル、マルクスなどにまで及ぶ。そればかりではない。今日もなお、われわれは、アリストテレスの多面的な領域にわたる厖大な諸著作から、いやとくに当面『形而上学』だけにかぎっても、一と多、存在、実体・本質、量と性質、同と異、形相と質料、原理・原因、可能性と現実性、運動・変化、個別と普遍などの弁証法的カテゴリー[5]について、また矛盾律と弁証法的矛盾との関係について、等々、哲学上の基本問題にかんして多くの示唆にとむ考察をうけとることができるのである。他方、アリストテレスのプラトン主義的な神学から今日の哲学的思索のための糧を得ようとする人々も少なくないばかりでなく、N・ハルトマン、M・ハイディガーらは、かれらの独自な存在論を形成するにあたって、アリストテレスを深く研究したのである。

『形而上学』はこのようにじつに内容豊かな、さまざまな読まれ方をゆるす書物であるが、わたくしがとくにここで指摘しておきたいのは、前述したその冒頭の言葉のなかに、古代、イオニア地方に学問研究がはじまって以来、それを担った人間の、主体的な力の宣言を読みとることができるであろう、という点である。一言でいえば、それは知的な愛ということである。なんであれ、およそ対象についての認識は、人々の実生活のなかで、そこから提起される現実的諸要求にこたえるために、営々たる努力によってしだいに獲得されてゆくものであるが、そのためには、主体の側にその対象を知りたいという意欲が、すなわち強固な知的な愛がそなわっているのでなければならない。この知的な愛が、古代ギリシアにおける哲学と科学とのめざましい発展をみちびいた一つの無視することのできない主体的な要因であった、と思われるのである。哲学という意味のギリシア語が知恵への愛（φιλοσοφία＜φιλο＋σοφία）という意味をもっていることも、周知のところであろう。

そしてアリストテレスは、人間における学問・技術の成立をふりかえって、実生活の必要のために、人々が共通にもっている感覚や経験をこえて新しい技術がしだいに見いだされ、さらに、生活を快いものとするための技術も発見されていったことを述べ、つづけてこう書いている。「さらに、すでにこうした諸技術がすべてひととおり備わったとき、ここに、快をめざしてのでもないがし

かし生活の必要のためでもないところの認識（エピステーメー）〔諸学〕が見いだされた、しかも、最も早くそうした暇な生活を送り始めた人々の地方において最初に。だがエジプトあたりに最初に数学的諸技術がおこったのである。というのは、そこでは、祭司階級のあいだに暇な生活をする余裕が恵まれていたからである[6]。このように、閑暇（スコレー）が生ずることによって、人々は学問研究という、精神的な活動にたずさわることができるようになったことが、注目されている。それらの活動は、もはや、人々の生活の必要のためでもなければ生活の快のためでもない、そうしたことから離れて、これまでの知識を拡大してゆこうという要求にかられて、活動はすすめられた。すなわち、アリストテレスがここで語っているのは、いわゆる物質的労働と精神的労働との分離であり、社会の階級分裂を基礎にして支配階級（とくに古典古代的な奴隷所有者階級）のあいだで、学問研究が生活と実践とから相対的に独立しておこなわれようになっていったということ、そして諸学が誕生してゆくなかで、存在をまさに存在として研究し、さらに神についての思索をおこなう学問――第一哲学――が形成されるにいたったということである。

それゆえ、『形而上学』冒頭の言葉は、アテナイその他のポリスにおける奴隷制的民主主義の形成と展開を背景とする学問研究、とくに第一哲学の分野の相対的自立化と、それを推進する人々のいだく知的愛の誇らかな自覚とを語ったものであるといえる。それだけにいっそう、その言葉は、われわれに荘重なひびきをもって語りかけてくるのである。

しかし同時に、学問研究が、人々の実生活の必要と切り離されてすすめられるようになり、そしてその分離自身が肯定的にうけとられるようになると、実生活と実践よりも学問研究自体がいっそう尊いものであるかのようにみる傾向のうまれてくることを、われわれは認めなければならない。じっさいアリストテレスは、さきに引用した箇所につづけて、こう書いている。「ただ認識することそれ自身のゆえに認識することを選び望む者こそ、最も純なる学〔認識〕を最も真剣に望む者であり、」いまこれから展開しようとしている学、第一哲学こそは、まさにそうした純粋学であり、そのような学は、他の諸学が隷属的であるのにたいし、まさに王者的な学、自由人

的な学でなければならない、とするのである。（このような規定の仕方のうちには、当時の奴隷制社会の反映がみられる）。この見地は、あたかも、学問研究にいそしむ生活、すなはち観想的、理論的な生活に比べれば、実践的生活が本質的になにか低い劣ったものであるかのようにみなす見地、しかも、前者のうちでは、ひたすら形而上学的な思索にふけり、それだけいっそう神にあやかりうる生活こそが人間にとって最高の幸福をもたらすとする、至上主義的見地と結びついているのである。

この連関で、わたくしは、人間が動物とどの点で異なるか、人間は動物よりも何によってすぐれているかについて、アリストテレスがアナクサゴラスを批判して語っている箇所に注目しておきたい。アナクサゴラスといえば、前五世紀に、東方イオニア地方のクラゾメナイに生まれ、イオニア的な学問的伝統をひきつぎながら多元論的な自然学を展開し、アテナイで活動した――ペリクレスの庇護のもとにこのポリスにイオニア的な自然学を導入したことでも功績のある――ひとである。しかも、かれは、太陽を燃える石塊だといったために、アテナイ人たちから無神論を唱えるものとして訴えられ、このポリスを去らなければならなかった。

さて、アリストテレスは『動物部分論』で次のように書いている。「直立性のものには前脚の必要がないので、自然はその代りに腕と手を与えたのである。そこで、アナクサゴラスは、『手をもつがゆえに、動物のうちで人間が最も思慮深いのである』というのである。しかし、『最も思慮深いがゆえに、手を得たのである』とする方が理に適っている。[8]」アナクサゴラスは、人間について、まず、その手に注目している。手によって人間は労働するのであり、労働がまた人間をつくってきたのである。手をもつことによって人間は動物から自己を区別し、独自な発展をしてゆくことができるようになった。そして人間は、言語と思考を発展させ、思慮深くなったのである。こうした見地は、生物を、したがってまた人間を、進化してきたものとしてとらえる、イオニア自然学の系譜にある生物観の線上で、形成されてきたものである。[9]だが、生物の種の永遠性の見地をとっていたアリストテレスは、アナクサゴラスの見解に反対するのである。

アリストテレスはつづけて書いている、「自然も可能な事柄のうちから最良のことをなすものである以上は、

手をもつがゆえに人間が最も思慮深いのではなく、逆に、人間は動物のうちで最も思慮深いがゆえに手をもっているのである。というのは、最も思慮深いものは、最も多くの道具をうまく使いこなすはずであり、そして手は、あたかも多くの道具の代りになる道具のようなものであるから、一個の道具ではなく多数の道具とみなさるべきである。そこで、自然は、動物のうちで最も多くの技術を獲得しうるもの〔人間〕に、最も多くの用途を持つ道具、すなわち手を、与えたのである。[10]」そして、この見解は、かれの「われわれの知っているすべての動物のなかで人間の類のみが、……神的なものに与かっている[11]」という神学的―プラトン主義的見地と不可分なものであることを、わたくしは指摘しておこう。いいかえれば、アリストテレスには、現実の生活と実践を、技術と、道具を使う労働とを、哲学的、観想的な生活にたいして、低い劣ったものとみなす見地が、こうしてやはり抜きがたくその基礎にあるのである。

だが、たとえそうであるにしても、そしてどのような批判が加えられうるにしても、かれの哲学は、二千年以上の歴史のなかを、他の者が何といおうと、それにかかわることなく、ひたすら自分自身の存在を比類のない思考の重量感をもって貫きとおしているのである。それは、およそ耳を傾けようとしないものにはむろん何も語ろうとしないが、その重い扉を開くことをあえてするものには、思索の糧となりうるものを示す。この意味で、冒頭の言葉は、遠く時代をこえてわれわれ語りかけてくる、重厚な、知的愛のおごそかな宣言といえるであろう。

（1）Aristoteles, Metaphysica, A, 980 a 21. アリストテレス全集第一二巻、『形而上学』出隆訳、三ページ。

（2）「存在としての存在」（τὸ ὄν ᾗ ὄν）が形而上学の対象とされているが、ここから後世、形而上学として「存在論」ontologia（＜ont-＋logos）が形成されることになる。自然的な対象、数学的な対象などが、それぞれ特定の規定性をもって存在しており、自然的諸学、数学などがそれぞれこれらを対象として成立しているのにたいし、およそ存在であるかぎりでの存在を、普遍的、抽象的に対象とするのが、形而上学（第一哲学）であるとされる。

（3）存在としての存在と神とは異なりながら、アリストテレスでは、ともに第一哲学の対象とされる。かれにおいて、両者の連関はつけられなかった。中世スコラ哲学においてtheologia（神学）とontologia（存在論）が区別されてくる。

（4） metaphysica「形而上学」という語の今日におけるさまざまな意味、――アリストテレス－アンドロニコスに始まるこの語のそもそもの由来から、ヘーゲル、マルクスらにまでいたる、そのさまざまな意味――について、拙著『現代の論理学』（一九七九年復刊）、第二部、第四章、二二四ページ以下を参照。

（5） これらは、ヘーゲル弁証法、唯物弁証法の基本カテゴリーである。これらのカテゴリーについては、アリストテレスの著作では、『形而上学』とともに、『自然学』『生成消滅論』を研究することがとくに重要である、『オルガノン』も重要であるけれども。

（6） Arist., Met., A, 981 b 20—25. 前掲訳、六—七ページ。

（7） Ibid., 982 a 32—b 2. 同上訳、九ページ。

（8） Arist., De part anim., A, 687 a 5—10.『動物部分論』全集第八巻、三九〇ページ。

（9） アナクシマンドロスがすでに生物進化の考えをもっていたことについては、Diels-Kranz, Die Fragmente der Vorsokratiker, 6 Aufl., 12 A, 10, 30. 山本光雄編『初期ギリシア哲学者断片集』一九五八年、一一ページを参照。

（10） Arist., De part. anim., A, 687 a 15—23. 前掲訳、同ページ。

（11） Ibid., B, 656 a 7—8. 同上訳、三一一ページ。

3

「大切にしなければならないのは、たんに生きる（ζῆν）ということではなく、よく生きる（εὖ ζῆν）ということである」（プラトン『クリトン』）[1]。

人間は、この一度の生を、たんに生きるのではなく、よく生きるのでなければならない。プラトンが『クリトン』でソクラテスに語らせているこの有名な言葉は、やはり大きな意味をもっており、人々にそのつど新たな問いを迫るものといえよう。ソクラテスはつづけて「その『よく』というのは、『美しく』とか、『正しく』とかいうのと、同じである[2]」と言っている。すなわち、よく生きるとは、また、美しく、正しく生きることである、とされるのである。

『クリトン』は、プラトンの初期の著作にぞくするが、かれの晩年に書いた最後の著作『法律』にも同様な思想が、しかし大衆への蔑視をも含めて、述べられている。「わたくしたちは、大衆のように、たんに生きながらえてあることだけ（τὸ σῴζεσθαί τε καὶ εἶναι μόνον）が、

人間にとって、最も貴いことだとは考えられません。むしろ、できるかぎり善い人となり、この世にあるかぎりそのようでありつづけることこそ、最も貴いことと考えています。[3]」

人間は、たんに生きるのではなく、よく生きるのでなければならないということ、しかし、これは、ソクラテス－プラトンだけの考え方ではなく、むしろ当時ギリシアの多くの思想家たちに――いや市井に生を送る少くはない人々にさえも、とわたくしはみなしたい――共通にいだかれていた考え方であったといえるだろう。アリストテレスも、よく生きるということはまた、幸福に生きることを意味するとしながら、『ニコマコス倫理学』で、「大衆も洗練された教養をもつ人々も、最高善として『幸福』をあげており、『よく生きること』と『よく行うこと』とを、『幸福であること』と、同じ意味のものとみなしている[4]」と書いている。

だが、ここに、一つの問題が生じてくる。人間は、よく、美しく、正しく生きるのでなければならないとして、それでは、よく、美しく、正しく生きることの内容如何、幸福とは何か、その内容如何、ということになると、人人のあいだに意見が分かれてくるのである。アリストテレス自身つづけて次のように書いている。「ところで、『幸福』とは何かということになると、かれらの意見は多岐に分かれ、大衆の提出する答は知恵のある人々の答と異なってくる。[5]」意見の分かれが、大衆と知者とのあいだでまず大別できるものかどうか、大いに問題である――この辺にも、この時期の哲学者にとっての、大衆を低く見て自分らと区別する見地がみられる――が、ともあれ、よき生活、幸福な生活を人々は求めてきたのであるし、また、よき生活、幸福な生活とは何かという問題をめぐって、多くの思想家たちは、まさに人間の生きるに値する生活の追究として、真剣な考察を重ねてきたのであった。

周知のように、『クリトン』は、すでにアテナイの法廷で死刑の判決をうけ、刑の執行される日を目前にひかえている獄中の老ソクラテスのもとに、早朝、友人クリトンが訪れ、脱獄をすすめたときの対談の模様を描いたものである。当時のアテナイでは、現在のように脱獄はそれほど困難なことではなく、脱獄をしようと思えば、じっさいにそれが可能であり、大目にみてもらえるとい

う事情があり、これが話の前提にある。このような前提のうえで、クリトンは脱獄をすすめるのである。ソクラテスはこれにたいし、自分がこれまで原則としてきたことは変えられない、国法にそむいて脱獄することは、よい正しい生き方ではないとして、クリトンのすすめにしたがうことを拒むのである。

そのさい、もち出される重要な原則が、「大切にしなければならないのは、たんに生きるということではなくて、よく生きるということ」であり、「その『よく』というのは、『美しく』とか、『正しく』とかいうのと、同じである」ということである。そこで、ソクラテスは、すでに死刑の判決をうけている自分がアテナイ人の許しをえないで、ここから逃亡するのは、はたして正しいことか、正しくないことか、美しいことか、美しくないことか、これがまさに考慮すべき問題だというのである。いまここでその論議の詳細にわたることを避けるが、かれのいうところは、つまり「祖国は尊いもの、おごそかなもの、聖なるもの」[6]であって、どんな場所においても、国家と祖国が命ずることは、なんであれしたがわなければならない、国家のなかで生まれ、育てられ、ずっと生活してきた以上は、たとえ「打たれることであれ、縛られることであれ、戦争につれてゆかれて、傷ついたり、死んだりするかもしれないことであれ、その通りにしなければならない。正しさとは、この場合、そういうことなのだ」[7]というのである。

すでに高齢に達しているソクラテスは、ここで自分の死に場所を選んでいるのかもしれない。そうであるにしても、やはり、かれが脱獄しなかった理由、建て前となるのは、その日頃からの主義主張、生活の原則をまげなかったことにあるといってよいだろう。『パイドン』にみるように、かれは、その最後の日に、これまで哲学を共にしてきた友人たちにかこまれて魂の不死の問題をめぐって語りあい、やがて毒にんじんの杯を静かに飲みほすのであるが、これは、やはり一代の哲人ソクラテスの最後にふさわしい、厳そかな死の選択として敬意を表すべきであるのは、いうまでもない。

しかし、その点をひとまずおけば、よく、正しく、美しく生きるということが、ソクラテスがいうように、はたして国法の定めたこと、命じたことには何でもしたがうということになるのかどうか、それは大いに問題であ

ろう。今日のわれわれからすれば、国法のつくられる過程をみても、また国法のもつイデオロギー的な性格、とくに階級社会におけるその階級的性格を考えても、国法にたいする批判的態度はどうしても必要になるであろう。これは、国家とは何か、法とは何かという問題を根本的に考えぬくことなしに、すますわけにはいかないことを意味する。

ともあれ、このようにして、よく、美しく、正しく生きるということが、はたしてどういう生き方を選ぶことになるのか、そして、何が人間にとって生きるに値する生き方なのか、という問題は、核兵器を始めとして凶悪な兵器がますます開発され、人間の「平和に生きる権利」を踏みにじって「死の商人」がますます倨傲にふるまっている、この二十世紀の最後の時代に生きるわれわれにとって、哲学上、倫理学上のきわめて根本的で、さし迫った問題として、あらためて提起されなければならないのである。ここでは、どこまでも徹底したヒューマニズムと民主主義を基礎としながら、個人的、階級的、民族的、人類的な視点からの、その複雑な諸連関のなかからの、問題への真摯な接近をおこなうことが迫られているのである。(8)

(1) Plato, Crito, 48 b.『クリトン』全集第一巻、一三三ページ。
(2) Ibid., 同上訳、同ページ。
(3) Plato, Leges, 707 d.『法律』全集第一三巻、二五〇ページ。
(4) Arist., Eth. Nicom., A 1095 a 18—20.『ニコマコス倫理学』全集第一三巻、七ページ。
(5) Arist., ibid., a 20—22. 同上訳、同ページ。
(6) Plato, Crito, 51 a. 前掲訳、一四一ページ。
(7) Ibid., 51 b. 同上訳、同ページ。
(8) ギリシア哲学史および現代にいたる哲学史全体（とりあえず東洋等をのぞく）についてのわたくしの一般的展望は、とりあえず、拙著『ヘレニズムの思想家』（一九八二年）に述べられている。この著作は、ヘレニズムの思想を主題としているが、そのさい、とくに、それを、古典古代的奴隷制社会の形成と展開を窮極の基礎とするギリシア思想全体の発展のなかでとらえ、あわせて、現代にいたる後世へのその影響をも考慮している。

（一橋大学教授）